

木島平村
観光ビジョン

令和7年度3月

木島平村

目次

第1章	観光ビジョン策定の背景と目的	2
1	策定の趣旨	2
2	社会動向や観光を取り巻く環境	3
(1)	全国の観光動向：量から質への転換と持続可能な観光	3
(2)	長野県内の観光動向：四季を通じた選ばれる目的地づくり	3
(3)	周辺エリアの状況：強力なブランド圏域における「個」の確立	4
3	木島平村の現状と課題	4
(1)	木島平村の特性と観光資源のポテンシャル	4
(2)	木島平村における観光課題	5
4	本ビジョンの位置づけと計画期間	8
(1)	本ビジョンの位置づけ	8
(2)	計画期間	8
第2章	ビジョン策定のプロセスと共有された価値	9
1	ビジョン策定のプロセス	9
(1)	事業者ヒアリングの実施	9
(2)	木島平村村民会議の実施	12
2	共有された木島平村の価値	14
第3章	木島平村の観光ビジョン	18
1	基本理念	18
2	コンセプト	19
3	4年後の将来像	20
第4章	基本施策と具体的な取り組み	22
1	基本施策	22
2	具体的な取り組み	23
第5章	推進体制	27
1	推進体制の考え方	27
(1)	組織間連携の強化と最適化	27
(2)	役割分担	28
2	PDCAサイクルによる進捗管理	28

第1章 観光ビジョン策定の背景と目的

1 策定の趣旨

近年、観光を取り巻く環境は激しく変化している。人口減少や少子高齢化の進展、価値観の多様化、さらには持続可能性（サステナビリティ）への関心の高まりなど、地域社会の在り方そのものが問い直される時代を迎えている。こうした中、観光の果たす役割は、単なる交流人口の拡大や経済波及効果の創出に留まらず、地域特有の自然や歴史、文化といった「固有の価値」を再発見・再定義することで、住民自身の郷土に対する誇り（シビックプライド）を醸成し、地域課題の解決に共に取り組む「関係人口」を重層的に育む戦略的な手段として、その重要性は一段と増している。

本村においても、これまで豊かな自然環境や基幹産業である農業、北信州の冬を象徴するスキー場等の地域資源を最大限に活用し、独自の観光振興を推進してきた。しかし、訪日外国人観光客の急増（インバウンド需要）や、消費者の価値観が「モノからコト、そしてトキ（体験）」へと移行する中で、既存の観光資源を単体で提供するだけでは、多様化する現代のニーズに十分に答えきれない状況にある。

以上のような社会情勢の変化や観光需要の多角化を的確に捉え、将来にわたって持続可能な地域社会を構築するためには、今後の観光振興の指針となる方向性を改めて整理し、全村挙げて共有することが不可欠である。

本ビジョンは、事業者ヒアリングや村民会議における丁寧な対話を重ねて見出した「木島平村ならではの価値」を計画の柱に据え、本村らしい観光の在り方を明確に定義し、官民が連携して推進すべき具体的施策の指針として、ここに策定するものである。



出典元：（一社）木島平村観光振興局

2 社会動向や観光を取り巻く環境

(1) 全国の観光動向：量から質への転換と持続可能な観光

新型コロナウイルス感染症を経て急速な回復を見せる観光需要は、今、大きな転換期を迎えている。政府が令和5年3月に閣議決定した「観光立国推進基本計画（第4次）」では、これまでの来訪者数（量）の追求から、観光を通じた地域への経済波及効果や住民の生活の質の向上を重視する「持続可能な観光立国」の実現が掲げられた。

特にインバウンド戦略においては、訪日外国人旅行者数といった数値目標以上に、「観光消費額の拡大」や「地方部における外国人延べ宿泊者数の増加」が重要な指標として位置づけられている。これは、都市部への偏在を是正し、地方がいかんにして来訪者に「選ばれる目的地」となり、経済的・文化的な還元を受けられるかが問われていることを示している。

これまでの旅行形態は、大勢で名所を巡り、お土産を買って帰るといった「団体・周遊型」が主流であったが、現在は旅行者自らが目的を持ち、その土地の歴史や人々の暮らしに深く触れる「個人・目的型」へと移行し、消費者の関心は、単なる名所旧跡の観光から、その土地ならではの「体験」や「ストーリー」を重視する傾向へと深まっている。これに伴い、観光の価値は「どれだけ多くの人を呼ぶか」という数の競争から、「一人ひとりがどれだけ長く滞在し、地域と心のつながりを持ってたか」という満足度の深さへと明確に転換している。また、自然環境の保全と観光振興を両立させる「持続可能な観光（サステナブル・ツーリズム）」への意識も、世界的に定着しつつある。

(2) 長野県内の観光動向：四季を通じた選ばれる目的地づくり

長野県においても、豊かな自然景観、世界水準のウインタースポーツ拠点、温泉資源などを背景に、国内外からの来訪者数は堅調な回復・増加傾向にある。特に「スノーリゾート信州」としてのブランド力は高く、冬期のインバウンド需要は県経済を牽引する大きな柱となっている。

一方で、特定の観光地への過度な集中による「オーバーツーリズム」の懸念や、冬期に観光客が偏る「季節偏在」、さらには地域間での集客格差といった構造的課題も顕在化している。県では、グリーンシーズンの魅力向上による通年観光化や、デジタルトランスフォーメーション（DX）を活用したマーケティング、さらには地域独自の個性を活かした「選ばれる目的地（デスティネーション）」づくりを重点的に推進している。

(3) 周辺エリアの状況：強力なブランド圏域における「個」の確立

木島平村の周辺には、野沢温泉、志賀高原、斑尾エリアなど、国際的な知名度を誇る強力な観光地が隣接している。これらは、歴史ある温泉文化や日本最大級のスノーフィールドといった明確なブランドポジションを確立しており、広域的な誘客の核となっている。

これら周辺エリアは、雪や山岳景観といった共通の観光資源を有しながらも、それぞれが「アフタースキーの充実」や「大規模リゾートの利便性」といった独自の強みで差別化を図り、海外からのインバウンド誘客にも繋がっている。こうした強力な観光圏域に位置する本村においては、周辺地域との広域連携を維持、強化しつつ、他地域にはない「農村の穏やかな景観」や「ありのままの自然」、そして「素材を活かした豊かな食」といった独自の個性をいかに際立たせ、独自の立ち位置を構築できるかが、これからの木島平村が選ばれる理由になると言える。

3 木島平村の現状と課題

(1) 木島平村の特性と観光資源のポテンシャル

木島平村は、北信州の豊かな自然に囲まれた、のどかな農村地域であり、四季折々に表情を変える美しい景観とともに、農業を基盤とした豊かな暮らしが息づいている。特に、「日本一美しいブナの森」とも称されるカヤの平高原のブナ原生林をはじめ、肥沃な大地が育む「日本一とも称される米」や高品質な農産物、それらを支える清らかな水資源は、他地域にはない本村最大の強みである。

また、スキー場やクロスカントリーコースなどのスポーツ施設も充実しており、合宿や大会を通じて多くの人々が訪れる拠点となっている。大規模な観光地とは一線を画し、落ち着いた環境の中で自然や地域の暮らしにじっくり触れられることは、木島平村ならではの特別な価値と言える。

さらに、北陸新幹線の停車駅である飯山駅から本村までは車で約10分の距離であり、首都圏からのアクセスは比較的良好であると言える。近隣には野沢温泉、志賀高原、斑尾エリアといった国際的な知名度を有する観光地が隣接しており、これら強力な観光圏域の一部として、周遊観光や滞在拠点を担いうる高いポテンシャルを有している。

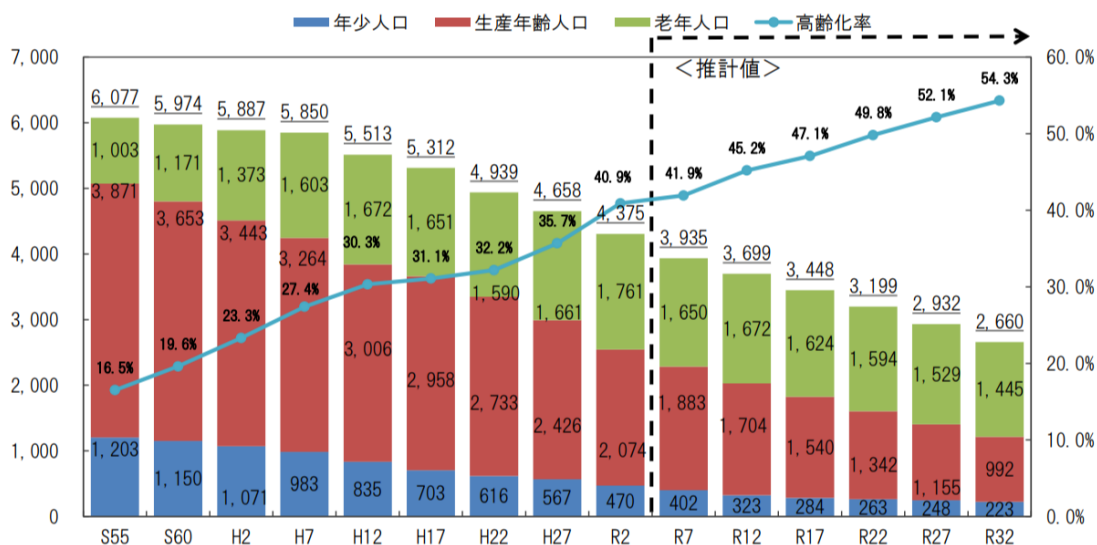
(2) 木島平村における観光課題

(ア) 人口減少と担い手不足の深刻化

本村の人口は、木島平村人口ビジョン（令和7年2月改訂版）によると、令和5年時点で4,137人であり、平成2年データと比較すると約30%減少しており、高齢化比率も令和2年に40%を超えている状況である。また、グラフ1の通りに、このままいけば令和27年には人口は2,932人まで減少し、高齢化率も50%を超えると推計されている。そのため、地域活動や観光受入を支える人材の確保が喫緊の課題となっている。

また、地域経済分析システム（RESAS）¹のデータによると、村内の観光関連事業所数²は2014年に47軒あったものが、10年後の2024年には39軒まで減少しており、後継者不足や経営規模の縮小による供給力の低下が懸念される。

グラフ1 木島平村の人口と世帯数の推移



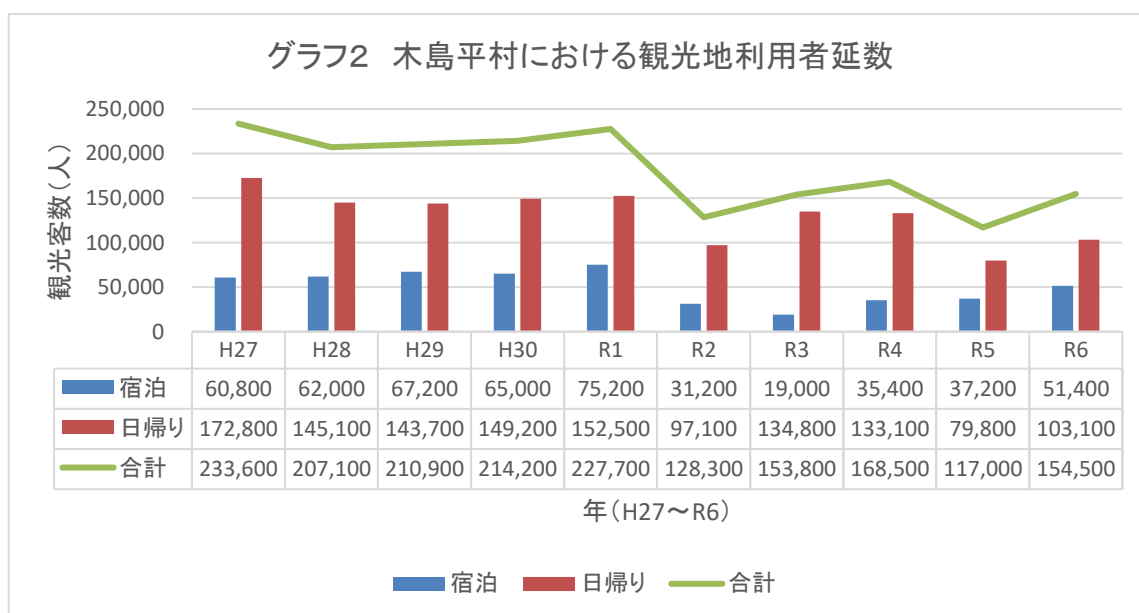
¹ 経済産業省と内閣官房が提供する、地域の人口、産業、観光、人流などの官民データを地図やグラフで「見える化」できる地域経済分析システム

² RESASの事業所立地分析による「トラベル（旅行・観光・温泉・旅館・ホテル）」「飲食店」「スポーツ&レジャー（スポーツ・趣味娯楽・レジャー）」の3つの大分類よりデータを抽出

(イ) 観光客数の低迷と特定シーズンへの過度な依存

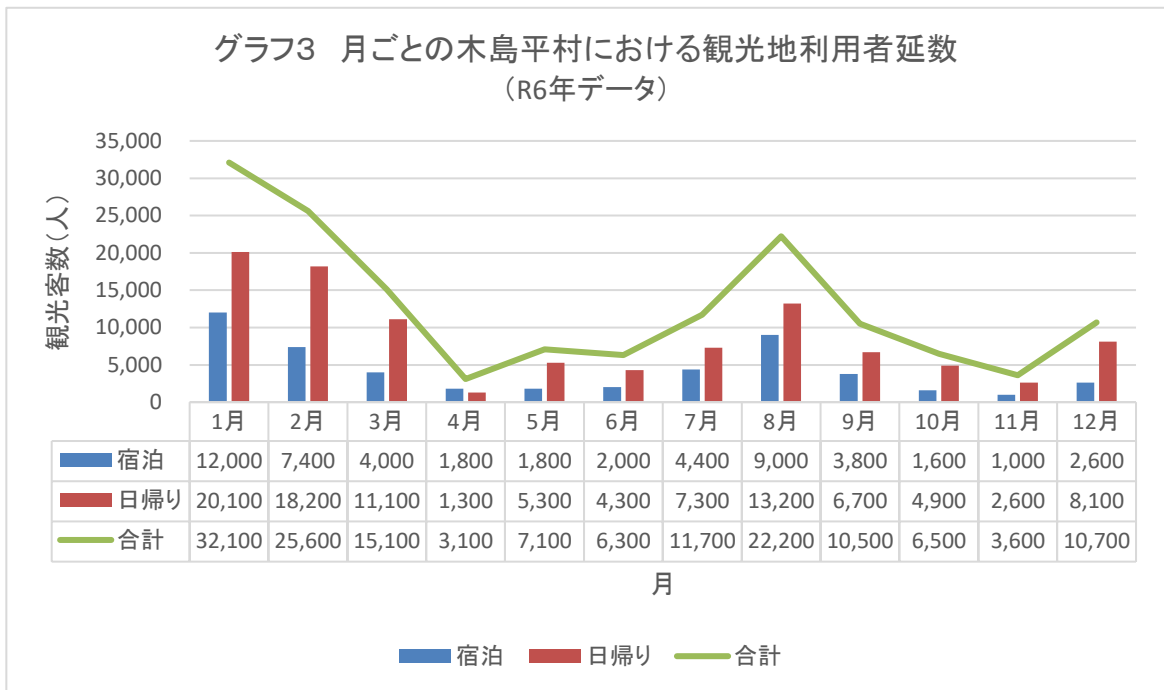
観光客数の推移については、現行の統計手法を導入した平成4年以降、平成12年の530,700人をピークに減少傾向が続いている。特に、令和2年の新型コロナウイルス感染症の影響により大幅な下落を記録した。(グラフ2参照)その後、令和3年から令和4年は回復の兆しを見せたものの、令和5年4月から村内の主要な観光施設であった馬曲温泉が臨時休業したことにより、日帰り客が大幅に減少した。営業再開後は回復したものの、依然としてパンデミック以前の水準には戻っておらず、停滞傾向にある。

また、本村の観光構造における大きな特徴は、季節による繁閑差が顕著であることである。グラフ3が示す月別の観光地利用者延数の推移を見ると、観光誘客の核であるスキー場利用者が増加する12月から2月の3カ月間に、年間観光客数の約44%が集中しており、いわゆる「冬季依存型」の構造を呈している。一方で、春・秋のシーズンは閑散期となっており、年間を通じた安定的な集客が課題である。こうした季節偏在は、通年での雇用維持や施設経営の安定化を阻む大きな障壁となっている。



長野県観光地利用統計調査のデータをもとに作成

グラフ3 月ごとの木島平村における観光地利用者延数
(R6年データ)



長野県観光地利用統計調査のデータをもとに作成

(ウ) 公民連携による観光施設運営と地域共創の必要性

本村では、近年、行政運営の効率化及び財政の健全化を図るため、民間のノウハウを活かした公民連携による観光施設の運営を進めている。こうした中で、観光施設の運営には、村、村民、民間事業者など多様な主体が関わるようになっており、それぞれの立場や役割を踏まえながら連携して取り組んでいくことが重要となっている。

一方で、現状、村としての中長期的な将来像が固まっていないことや、観光の方向性が関係者の間で十分に共有されているとは言えない状況にある。

村、村民、民間事業者がともにお互いの強みを活かし、協働し、共創していくためには、村全体としての観光のあり方（将来像）を設定し、それを実現していくためのロードマップ（戦略）が必要である。

また、共創にあたっては、行政は「公平（共）性・継続性」を、民間は「スピード・収益性」を重視するため、その認識を埋めていくために、双方の利益になる村のブランド価値の向上や観光と農業の一体的推進により、利益が観光施設に留まらず、村全体に利益を波及させるための仕組み（エリアマネジメント）づくりが必要である。

今後は、民間事業者の稼ぐ力や経営判断を尊重しつつ、村民や生産者、さ

らには村外のファンが観光施設の活用企画に参画し、アイデアを出し合うような関与の余白「関わりしろ」をつくることが重要である。こうした取組を進める中で、民間事業者のスピード感と村民の愛着を上手につなぎ合わせ、全員が「当事者」として村を支える、新しい地域経営の形を模索することが求められている。

4 本ビジョンの位置づけと計画期間

(1) 本ビジョンの位置づけ

本ビジョンは、木島平村における観光振興の中長期的な指針として策定するものである。「第7次木島平村総合振興計画」との緊密な整合を図り、観光分野における具体的な重点施策を体系化するとともに、その目指すべき方向性を村全体で共有することを目的とする。

本村の観光は、基幹産業である農業をはじめ、商工業、教育、移住定住施策など、多岐にわたる分野と密接に関連する「横断的な施策」である。したがって、本ビジョンは単一の部門計画に留まるのではなく、関連する諸計画や施策と相互に連携し、地域経済の循環と活性化を牽引する総合的な枠組みとして位置づける。

また、本ビジョンは将来像や基本理念を示すだけでなく、実行段階における重点的な施策や推進体制の在り方を明らかにするものである。策定後は、本ビジョンに基づき具体的なアクションプランを策定し、進捗管理（PDCA サイクル）を行いながら着実な執行を図るものとする。

(2) 計画期間

本ビジョンの計画期間は、第7次木島平村総合振興計画の実施期間を踏まえ、令和8年度から令和11年度までの4年間とする。ただし、社会情勢の急激な変化や施策の進捗状況を勘案し、必要に応じて柔軟な見直しを行うことで、実効性の高い運用を継続していく。

【参考】木島平村第7次総合振興計画の計画期間

基本構想：令和7年から令和14年の8年間

うち基本計画（前期）：令和7年から令和10年の4年間

第2章 ビジョン策定のプロセスと共有された価値

1 ビジョン策定のプロセス

本ビジョンの策定にあたっては、地域の実情に即した実効性の高いものとするため、多様な主体の参画によるボトムアップ型の検討プロセスを重視した。具体的には、現場の声を吸い上げる「事業者ヒアリング」と、村の未来を共に描く「村民会議」の二軸により検討を重ねた。

(1) 事業者ヒアリングの実施

村内外の観光関連事業者、宿泊・飲食事業者をはじめ、スポーツ関連事業者、商工関係者、農業関係者など計 16 名を対象に、個別でのヒアリングを実施した。以下、ヒアリングでの主な内容をまとめている。

■観光分野（宿泊・観光施設等）

主な意見
過去はスキー客を行政が中心になってペンションや民宿に集客・送客していたが、時代やスキー場の運営形態も変わったいま地域内での連携を改めて考え直していく必要があると思う。
木島平の周辺に大きな観光地や評判の良い施設も多いため、宿泊客によっては村外の施設を紹介してしまう場合もある。
森のグリーンシーズンを少しでも長引かせたい。また、森をクローズした後の活用方法も検討したい。
宿泊のお客さんは村内の施設利用者だけでなく、野沢温泉のお客さんも割合としては多い。あとは、斑尾や竜王からの中継地点として選ばれているような気がする。
コロナ禍の運営を経て、夏場の宿泊やBBQ利用も増えた。冬場の利用を追い抜き始めている状況でもある。
まわりにメジャーな観光地が多い中で、万人には刺さらないかもしれないけれども、コアなファンに刺さるようなまちづくりがいいと思う。
ペンションはコロナ禍でお客さんは増えたがクーポン利用の新規客がほとんどで正直モチベーションは下がった。単に人が来てほしいわけではなく、本当に喜んでくれるファンの人たちに来てほしい。
豊かな自然は残しつつ、この「ふるさと感」を今後も大事に守ってほしいと思っている。ホッとできる村だからこそ観光地化は絶対にしたくない。

野沢温泉は商売が上手で積極的に事業化している印象だが、木島平村は地に足付けてしっかりやっている印象。トレランの大会を民間主導でやったり、クロカンの環境が充実していたりなど、行政にあまり寄りかかっていないように感じる。
このエリアの課題は観光が通年型ではないこと。グリーン期の策を考えないといけない。
自分たちの町村だけでなく、行政区分を超えての近隣エリアの住民の往来を増やせると理想だと思う。コンテンツの共有が住んでいる人の生活を豊かにすると思う。
自分がやっているこの宿を目的地として来てくれるような人にもっと来てもらいたい。
野沢温泉の様子を見ていて、そんなに積極的にインバウンドの受け入れをしたいとは思っていなかった。木島平らしさを出すのはインバウンドではないと思う。
施設として他の村内施設や宿との声掛けや連携はあるように思うが、もっと村一帯を巻き込んだ取り組みもできると思う。
村内の2次交通は大きな課題だと思う。
地元を案内するガイドシステムがあったらいいと思う。
木島平は観光施設が少ないので森の活用をもっと積極的にやりたい。
グリーン期の誘客の仕掛けは必要。いまはトレランの大会くらいでしか集客できない。
木島平ならではの良さを守りながらお客さんを呼びたい。今あるものをどう生かすか考えたい。

■ スポーツ分野（スキー場含む）

主な意見
スキー場としては夏場の企画にも注力しながら通年での労働力の確保に繋げたい。
スキー場として地域連携できる部分は送客の部分だと思う。新幹線の駅から近いという強みを活かして駅と村内の送客連携をうまくできると理想。
スキー場のホテルは学生の利用はもちろんだが、企業との連携なども強めていきたい。
村内での雇用促進や村内学生との連携は重要だと思っている。
この村のローラースキーコースは日本最長でクオリティーも最高峰の場所。全国でもコースは片手で数えられるくらいしかなく、マイナースポーツかもしれないがとても強みになると思う。
クロスカントリーは夏の7月～9月の大学合宿シーズンだけでもトータル3500泊くらいはある。
今後は競技選手の育成だけでなく、生涯スポーツの一環としてトレイルランニングやボートの選手などを巻き込んでいくような動きを積極的にしていきたい。

大会も積極的に増やしていきたいが、クロスカントリーにおける村内のコーディネート人材は少なく、スポーツ関係を一手に取りまとめる組織もないため、一気に拡大や多角化は難しいかもしれない。

クロスカントリーのナショナルトレーニングセンターは現状決まっていないため、それを木島平に呼び込めたら理想だと思う。

■ 商工分野

主な意見
この村の観光について、広域連携は必須だと思う。飯山市、野沢温泉村、山ノ内町、栄村など他の地域も回る中で木島平も知ってもらう必要がある。ただ、信越自然郷が主導だとどうしても飯山市中心になってしまう。
何か村としてのテーマや方向性などが明確化されていると村内事業者もそうであるが役場のいろいろな部署もそれに向かって動けると思う。
やりたいことがある人がそれを実現できるように支援したい。そうすると人が集まると思う。
自分は商店をやっているが、村内外問わずいろんなコラボ企画やイベントなども来るもの拒まずのスタンスで積極的に実施したいと思っている。
漬物のふるさと納税の需要は結構ある。また、地元の農家さんの不要な野菜も買い取りも行っており、こっちも安く入れられるし、農家さんにとっても買い取ってもらえるのでwin-winの状況。
きれいな水と空気は山のおかげ。森を大事にしたいという想いから木育をやっている。
子どもたちが木工体験をあまりしない。大工になりたいという子もいるが、どこまでその関心を維持できるか。将来「家を作るなら地域の木だよ」と言ってくれるようにしたい。
どこの自治体も考えていることは似てきてしまう。木島平ならではのものがわからないので目玉となるものが欲しいとは思う。

■ 農業分野

主な意見
米農家は若い世代が継いでいるところが結構多い印象。周辺の他の自治体と比較するとずば抜けて若いと思われる。
米の新規の間合せも結構入るが、在庫はそんなにない状況なのでほとんどお断りしている。売り先はほとんどが県内のお店に卸している。
若手の青年部があるので米農家同士の横の繋がりはそこである程度はあると思う。
田んぼは余っていない状況のため、拡大できるならしたいが、簡単に拡大していくことはできないのが現状。

個人的には子どもたちに向けた米作りの取り組みも実施してみたいと思う。
野菜の作付けは土地があればもっと拡大したい思いはあるが、土地が荒廃地しかない。
行政との連携で移住定住のお試し農業の受入れや大学生の受入れ、国の職員の受入れなど積極的に行っている。
野菜農家の横連携はほぼない。できることがあるならやりたいと思う。
昔は観光ツアーの農業体験の受入れもやったことはあるが続かなくてやめてしまった。
インバウンド向けの農業アクティビティは可能性があると思う。
若い人がここで農業をやりたいと思うようなハード改善(土地改良)をしていく必要がある。
とにかく子どもが増えてほしいと思う。都会だと少し嫌がられるようなわんぱくな子どもをむしろ歓迎したい。
村の食堂があと数年後には無くなってしまいう可能性もあるため課題だと思う。

(2) 木島平村村民会議の実施

多様な世代や立場の村民（計 12 名）が集い、木島平村の観光の未来を議論する「木島平村村民会議」を全 4 回にわたり開催した。各回では、現状分析から将来像の可視化まで、段階的な合意形成を図った。

《各回の内容》

● 第 1 回「木島平村の魅力（固有価値）の再発見」

本村の強みを改めて問い直し、将来の観光の核となる資源を抽出した。議論を通じて、「おいしい米と水」「心身の健やかさと心の豊かさ」「ありのままの自然と原風景」「温かい人柄」といった要素が、村の根源的な魅力であるとの認識を共有した。「今あるものを活かす」という、持続可能な観光への基本姿勢が確認された。

● 第 2 回「理想と現実のギャップ（課題）の整理」

理想とする村の姿を実現するうえで、現状不足している要素や障壁について議論した。「実行力のあるリーダーの不足」「地域内での経済循環の欠如」「対外的な発信力」に加え、「拠点となる宿泊・飲食・商店の機能不足」といった具体的な課題が挙げられた。また、村民自身の主体性や、活動を継続するための成功体験の重要性についても深く踏み込んだ。

- 第3回「観光ビジョンの骨子と“暮らし”との連携検討」

これまでの対話を集約したビジョンの骨子案を提示し、妥当性を検討した。また、他地域の事例を参考に、観光を単なる集客施策ではなく「暮らしの質を向上させる手段」として捉え直し、生活と観光が互いに良い影響を与え合う仕組みについて意見交換を行った。

- 第4回「将来像の可視化と参画への意志確認」

最終回では、議論された将来像をイラストによって可視化し、目指すべき村の姿を全員で共有した。実現に向けた柱として、「人材・体制づくり」「具体的施策の着手」「継続的な関係性づくり」の3つの軸を整理。最後に、参加者一人ひとりが「自分にできる関わり方」を表明し、計画を実行に移すための自分事化を図った。

【会議の全体総括】

一連の会議を通じて、本村の観光振興は「木島平の日常の暮らしを大切にすること」を大前提とし、その延長線上に訪れる人との交流を築くべきであるという、本ビジョンの根幹をなす考え方が共有された。



木島平村村民会議の様子

2 共有された木島平村の価値

事業者ヒアリングおよび村民会議を通じて、本村の観光は「特別な観光地づくり」ではなく、「日々の暮らしの延長線上にある体験」にこそ真の価値があるという共通認識が形成された。

対話の中から紡ぎ出された、観光客と村民が無理なく交わる具体的な情景を、木島平村らしさを象徴する「6つの風景」として整理する。これらは本ビジョンの土台となる「共有価値」であり、今後の施策展開の指針となるものである。

① 語らいの風景：縁側での何気ない談笑

軒先に吊るされた干し柿が寒風に揺れ、雪解けの道を歩く長靴の音が響く。ふらりと立ち寄った隣人と、茶碗に注がれた熱い茶、そして自家製の野沢菜漬けを囲んで「ちょっと寄っていきなさい」と自然に笑い合う。



【来訪者が得る体験価値】

作られた接客ではなく、村の人々の暮らしや温かな人柄に触れる時間。何気ないやり取りの中に、村の空気感を肌で感じる「心の交流」を体験する。

【村民が届ける日常価値】

特別な準備は必要なく、日常の会話やささやかな気遣いそのものが提供資源となる。ありのままの交流が、村外の人にとってはかけがえのない価値になることを再認識する。

② 雪とふれあう風景：雪国を全身で楽しむスキー場

木島平のスキー場は極上のパウダースノー。山頂から一気に滑り降りる爽快感や、転んでも痛くない柔らかな雪の上で木霊する子どもたちの歓声。一方で、早朝の静寂を切り裂いて滑走する競技スキーの鋭いエッジの音や、起伏の激しいコ

ースで己を追い込むクロスカントリースキーのアスリートたちの荒い息遣い。滑り終えた後は、疲れた体を癒すべく、雪明かりの中で静かな夜を過ごす。



【来訪者が得る体験価値】

大規模リゾートにはない、混雑を避けた静かな環境で純粋に雪と向き合う体験。自然と一体になり、心ゆくまで身体を動かす解放感を味わう。

【村民が届ける日常価値】

豪雪をいとわず、雪と共に生きる。レジャーの場としてのホスピタリティと、競技者を支えるプロフェッショナルなコース整備・環境づくりを通じて、木島平ならではの雪文化の奥深さを提供する。

③ 静寂の風景：カヤの平高原での深い休息

樹齢 300 年を超えるブナの原生林。朝靄の中に巨木が立ち並ぶ静寂の森を、腐葉土の柔らかな感触を確かめながら歩く。高原に咲くニッコウキスゲやミズバショウが揺れ、聞こえるのはブナ林を吹き抜ける風の音だけ。



【来訪者が得る体験価値】

ブナ原生林の静けさや澄んだ空気に包まれ、心身を整える時間。日常の喧騒から離れ、本来の自分を取り戻すような深い癒しを得る。

【村民が届ける日常価値】

村の宝である自然環境を、次世代へ守り続けるという「守り手」としての姿勢。いまある自然環境を守ることそのものが、現代社会において極めて高い提供価値となる。

④協働の風景：農作業を通じたつながり

カヤの平から注ぐ冷涼な水が棚田を潤し、秋には「はぜかけ」された稲穂が夕日に輝く。村の農家と肩を並べ、泥に触れ、共に汗を流して収穫の喜びを分かち合う、泥臭くも清々しい時間。



【来訪者が得る体験価値】

土に触れ、ともに汗を流すことで生まれる地域との連帯感。単なる「体験」を越え、村の営みの一部に参画することで、第二のふるさとのような関係性が築かれる。

【村民が届ける日常価値】

農業という日常の営みをひらき、交流の場とする。作業の手順を教えること以上に、ともに作業を楽しむ姿勢が、新しい「関係人口」を生み出す種となる。

⑤恵みを囲む風景：地元の食卓を味わう幸せ

艶やかに炊き上がった白米、採れたてのネマガリダケの味噌汁、村のお母さんたちが作る「笹ずし」。土と水、そして寒暖差が育んだ野菜の力強い味が並ぶ、木島平ならではのご馳走。



【来訪者が得る体験価値】

木島平村の清らかな水と土が育んだ米や野菜を、旬の時期に味わう。華美な贅沢ではなく、日常の食事の中にある本質的な豊かさと美味しさに出会う。

【村民が届ける日常価値】

地元の食材を生かし、代々受け継いできた「誇れる日常の味」を提供する。普段通りの「おいしい」が、外の人を魅了する資源であることを誇りに思う。

⑥ 営みの風景：ありのままの日常に触れる感動

伝統の内山紙を漉く職人の姿、朝早くから田んぼへ向かう軽トラの列、稲刈りをする農家の背中。観光地として着飾ることのない、木島平の呼吸が聞こえてくるような素顔の営み。



【来訪者が得る体験価値】

広がる田園、朝夕の光の移ろい、雪景色、そして働く人の背中。特別に演出されたものではない、村の「ありのままの日常」が心に深く刻まれる。

【村民が届ける日常価値】

日々の暮らしや景観を丁寧に維持し続けること。その一步一步の積み重ねこそが美しい村を形づくり、訪れる人の心を動かす最大の源泉となる。

第3章 木島平村の観光ビジョン

1 基本理念

本ビジョンの根幹には、「観光は、村の暮らしや営みを守ることを前提とし、その魅力を無理のないかたちでひらいていくものである」という考え方を据える。木島平村の観光は、大規模な集客や急激な環境変化を目的とするものではない。本村の観光の基盤は、農業をはじめとする日々の営み、四季折々の自然、そして地域で育まれてきた人のつながりにこそ存在する。

振興にあたっては、まず村民の暮らしが守られ、住民自らが地域に誇りを持つことを前提とする。そのうえで、村に息づく本質的な魅力を「無理のないかたち」で外に向けてひらき、訪れる人との関係を丁寧に築いていく。観光はそれ自体が目的ではなく、この豊かな暮らしを次世代へつなぐための「手段」である。

本ビジョンは、この普遍的な考え方をすべての施策の土台とする。



出典元：(一社) 木島平村観光振興局

2 コンセプト

『暮らしまると、うまい村。木島平村』

— 暮らし・農・観光がつながる、関係づくりの村へ —

木島平村は、大きな観光地を目指しません。
この村に流れる日々の営みこそが、村のいちばんの魅力です。

恵まれた水と土がつくる「旨い」食。
豊かな自然と共存することで生まれた「巧い」暮らしの技。
人と人の距離がちょうどよく、心が落ち着く暮らしができる
「上手い」生き方。

暮らしまると、うまい村。

それが、これからの木島平村の
観光とむらづくりの目指していくかたちです。

【うまい村に込めた3つの意味】

・「旨い」：五感で味わう、村の恵み

日本一とも称される米や、清らかな水に育まれた野菜、澄み渡る空気。本村の豊かな風土がもたらす「旨さ」は、訪れる人の心身を潤し、本質的な満足感を提供する。

・「巧い」：磨き上げられた技と情熱

代々受け継がれてきた農業技術や、丁寧な手仕事。さらには、この地の雪と地形を活かして切磋琢磨するアスリートたちの技。村の中に息づく、ひたむきで「巧みな」力が、訪れる人に感動と活力を与える。

・「上手い」：健やかに生きる、暮らしの知恵

厳しい自然とともに生きる雪国の知恵や、日々の営み、そして訪れる人を温かく迎え入れる住民のおもてなし。無理なく、しなやかに「上手く」生きる村のスタイルそのものが、現代において価値ある体験となる。

3 4年後の将来像

本ビジョンが目指す令和11年度（2029年度）の木島平村は、村民会議での対話から描き出された「6つの風景」が、村のいたるところで日常の営みとして定着している姿である。それは、大規模な開発によって人為的に作られた観光地ではなく、村のありのままの「暮らし」が、訪れる人にとっても、住む人にとっても、本質的な価値として共有されている状態を指す。次ページに掲げる「木島平村の暮らしと観光がつながるみらいの風景」は、本ビジョンの理念とコンセプトが結実した、4年後の本村の情景である。

村に今ある「宝もの」を見つめ直し、それらを丁寧に、上手につなぎ合わせていくことで、4年後、我々は自らの暮らしにさらなる誇りを持ち、訪れる人と喜びを分かち合える「うまい村」を実現する。

【みらいの風景を読み解く3つの視点】

・「関係」が生まれる村へ

一度きりの消費で終わる観光ではなく、農作業をともにし、縁側で語り合うことを通じて、木島平村を「第二のふるさと」と感じるサポーター（関係人口）が着実に増加している状態を目指す。

・「うまい」が循環する仕組み

村の「旨い（食）」「巧い（技）」「上手い（知恵）」を誇りを持って届けることで地域経済が潤い、それが再び「農」や「暮らし」を守る力へと還元される、持続可能なサイクルを確立する。

・「無理のない」共生

行政・民間・村民がそれぞれの役割を担い、自らの生活ペースを守りながら、外の人を温かく迎え入れる。そんな、背伸びをしない「木島平らしいおもてなし」が、訪れる人の心を動かしている。

木島平村の

暮らしと観光がつながるみどりの風景

クロスカントリー

トレイルランニング

村の観光ガイド

人がつながる場

田植え

村人のおもてなし

きれいな水、豊かな風景



第4章 基本施策と具体的な取り組み

1 基本施策

本ビジョンでは、目指すべき将来像の実現に向け、以下の3つを基本施策の柱として具体的な施策を展開する。各施策は「第7次木島平村総合振興計画」と緊密に連携し、村の持続可能な発展を目指すものである。

(1) 村一体となった観光推進の体制づくり

事業推進の土台となる組織体制を整備し、役割の整理や責任の所在を明確化する。農業・観光・物産が横断的に連携し、地域全体でお客様を迎える「おもてなしの基盤」を構築する。

(2) 村の暮らしを軸にした体験コンテンツの開発

木島平村の最大の魅力である「日々の暮らし」を観光コンテンツとして再定義する。農業や豊かな自然環境を活かし、来訪者が村の営みに深く触れられる体験プログラムを拡充する。

(3) 木島平村ファンの拡大と継続した関係づくり

一過性の観光で終わらせず、長期的・継続的に村と関わり続けてくれる「木島平ファン（関係人口）」を育成する。ターゲットに応じた情報発信や滞在拠点の検討を通じ、選ばれる村としての戦略を展開する。



出典元：(一社) 木島平村観光振興局

2 具体的な取り組み

(1) 村一体となった観光推進の体制づくり

(ア) 観光・農業・物産等を一体的に活かすための組織体制の在り方の検討

村内では農業振興公社と観光振興局がそれぞれの専門分野において重要な役割を担っている。今後は、観光・農業・物産などの地域資源を横断的に活かすため、両法人をはじめとする関係主体の連携を一層強化していく必要がある。それぞれの強みや機能を活かしながら、地域資源を最大限に活用できる体制について検証を行い、効果的・効率的な連携のあり方や、持続可能な産業振興を支える組織体制の検討を進める。

例えば、観光と農業が連携した体験プログラムや、農産物・物産の販売と観光を結び付けた取り組みなど、関係機関が役割を分担しながら一体的に事業を展開できる組織づくりが考えられる。

▼第7次総合振興計画内の関連施策

3-3-①地域資源のブランド化

(イ) おもてなし人材の確保やガイド人材の育成

木島平村の観光の魅力は、特別な施設だけではなく、日常の「食・農・暮らし・自然・歴史」といった地域資源にある。こうした価値を来訪者に伝えるためには、それらを理解し、地域の魅力として発信できる人材の存在が重要である。現在活躍しているガイド層に加え、村外の視点も取り入れながら、地域資源の魅力を見直し、来訪者に伝えることができる人材の育成を進める。また、観光事業者だけでなく、地域全体で来訪者を温かく迎える「おもてなし」の意識を広げ、多様な分野で活躍する人材の確保・育成を推進する。

例えば、地域資源を学ぶガイド講座や、農業体験・自然体験を案内できる人材の育成、森林セラピーガイドの育成などが考えられる。

▼第7次総合振興計画内の関連施策

1-4-②文化財の保護と活用の推進

3-1-②体験交流観光の充実 / 3-1-③おもてなし観光の推進

(2) 村の暮らしを軸にした体験コンテンツの開発

(ア) 村の暮らしを体感できる体験プログラムの開発

木島平村の観光は、日常の暮らしそのものに価値がある。農作業や食の営み、四季折々の暮らしの風景など、村の日常にある営みを来訪者にとって魅力ある体験として再定義する。既存の取り組みを基盤としながら、村内の多様な生活資源を活かした体験プログラムの開発を進め、分散型観光の推進に向けた来訪者が木島平村の暮らしを実感できるコンテンツの創出を図る。

例えば、農作業体験や収穫体験、郷土料理づくり、地域住民との交流プログラムなど、暮らしの一場面を体験できる取り組みが考えられる。

▼第7次総合振興計画内の関連施策

3-1-①観光資源の活用と保全

(イ) 農業との連携強化による食のコンテンツ開発

基幹産業である農業が育む質の高い農産物や郷土料理を、村の魅力を伝える重要な資源として活用する。生産者や関係事業者との連携を強化し、地元産食材の活用や食文化の発信を通じて、本村らしさが感じられる食のコンテンツ開発を推進する。

例えば、地元食材を活かした飲食メニューやお土産の開発や、農産物を味わうイベント、農家や飲食店と連携した食の体験プログラムなどの展開が考えられる。

▼第7次総合振興計画内の関連施策

3-1-③おもてなし観光の推進 / 3-3-①地域資源のブランド化

(ウ) カヤの平高原を中心とした自然環境を生かした誘客

貴重なブナの原生林を有するカヤの平高原において、ブナ林の散策やキャンプなどの自然体験に加え、ブナの森再生に向けた「100年先の森づくり」といった環境保全の取り組みとも連動した自然体験を推進する。カヤの平高原ならではの魅力を発信し、豊かな自然を軸に誘客を進める。併せて、地域を周遊できる仕組みづくりを進める。

例えば、ガイド付きの自然散策や環境学習プログラム、森づくり活動への参加など、自然と関わりながら地域の価値を学べる体験の展開が考えられる。

▼第7次総合振興計画内の関連施策

3-1-①観光資源の活用と保全 / 3-5-③100年先の森づくり

(エ) スキー場やクロカンコース等のスポーツ施設を活用した合宿や大会などの誘致強化及び受入環境の整備

スキー場やクロスカンントリーコースを、冬期だけでなく通年でのアスリートの練習拠点として有効活用する。合宿や大会の誘致を強化し、スポーツを目的とした来訪を観光需要へとつなげる「スポーツツーリズム」の振興により、交流人口の拡大を目指す。

例えば、大学や実業団チームの合宿誘致、スポーツ大会の開催、トレイルランニングなどのアウトドアイベントの実施といった展開が考えられる。

▼第7次総合振興計画内の関連施策

3-1-②体験交流観光の充実

(3) 木島平村ファンの拡大と継続した関係づくり

(ア) 地域とファンとのかかわりが持てるプラットフォームの構築

来訪者との関係を一度きりの体験に終わらせず、継続的な交流を生む仕組みを構築する。SNSなどの情報発信ツールの活用や、再訪につながる仕組みづくりを進めることで、地域の営みや「人」に関心を持ち続けてもらうためのプラットフォームを構築し、多様で持続的な関係づくりを推進する。

例えば、体験参加者との継続的なコミュニティづくりや、農業体験・交流イベントなどの再訪プログラムの実施が考えられる。

▼第7次総合振興計画内の関連施策

3-1-⑤/5-6-②交流活動の推進による関係人口の創出

(イ) 地域内での滞在拠点となる施設の立ち上げの検討

日帰り・通過型観光からの転換を目指し、来訪者が複数日あるいは繰り返し滞在できる拠点の在り方を検討する。既存施設の有効活用や来訪者ニーズを踏まえた新たな滞在機能の整備について検討を行い、地域内での滞在時間を伸ばす仕組みづくりを進める。

例えば、古民家の活用や小規模宿泊施設の整備、交流機能を備えた滞在拠点の形成などが考えられる。

(ウ) ターゲットに応じた情報発信やプロモーション施策の強化

村と観光振興局の発信手段を効果的に運用し、ターゲット層やエリアを明確にした戦略的なプロモーションを展開する。魅力ある情報発信を強化し、観光需要の創出と認知度の向上を図る。

例えば、SNSや動画コンテンツを活用した情報発信、体験コンテンツと連動したプロモーションなどが考えられる。

▼第7次総合振興計画内の関連施策

3-1-④効果的なPR活動の推進 / 4-3-②魅力ある情報発信の強化

(エ) 近隣地域との広域連携による多様な来訪者への認知拡大

周辺の有名観光地を訪れる来訪者に対し、本村を周遊ルートや滞在拠点として選んでもらうための広域連携を推進する。多様な来訪者のニーズを把握し、インバウンド需要への対応も含めた受入体制の検討と誘客施策を進める。

例えば、近隣観光地と連携した周遊ルートの造成や、広域プロモーションの展開などが考えられる。

▼第7次総合振興計画内の関連施策

3-1-⑥インバウンド需要への対応・対策の検討



出典元：(一社) 木島平村観光振興局

第5章 推進体制

1 推進体制の考え方

本ビジョンに掲げた施策を着実に実行し、持続可能な観光振興を実現していくためには、行政だけでなく、観光関係事業者、農業者、そして村民がそれぞれの役割を認識し、一体となって取り組む体制が不可欠である。

木島平村の観光は、地域の暮らしや営みを基盤として成り立つものであることから、地域の多様な主体が連携しながら、無理のない形で観光を推進していくことが重要となる。

そのため、本ビジョンでは関係主体の役割を明確にするとともに、組織間の連携強化と進捗管理の仕組みを整え、官民が協働して観光振興を推進する体制づくりを進める。

(1) 組織間連携の強化と最適化

現在、本村の産業振興を支えている「農業振興公社」と「観光振興局」は、それぞれ農業と観光の分野で重要な役割を担っている。

今後は、これらの組織が持つ専門性やネットワークを活かしながら、農業・観光・物産などの地域資源を横断的に連携させる体制づくりを進める。

● 機能の相互補完

農業と観光の連携を強化し、地域資源の価値を最大限に引き出すため、両組織の機能を相互に補完しながら事業を推進する。

例えば、農業体験や食のコンテンツなど、農業と観光が連携した取り組みを企画・実施することで、地域資源の魅力をより効果的に発信していく。

● 組織の在り方の検討

効率的かつ持続可能な事業推進を目指し、現在の組織体制や役割分担の課題を整理したうえで、将来的な組織の在り方について検討を進める。

観光と農業の連携をさらに強化するため、必要に応じて組織の連携方法や機能分担の見直しなどについても検討していく。

(2) 役割分担

以下の通り役割を分担し、官民連携による推進を図る。

主体	主な役割
行政（村）	ビジョンの進捗管理、広域連携の調整、基盤となるインフラ整備、公施設の設置主体としての管理・監督
観光振興局・農業振興公社	体験プログラムの開発・運営、戦略的な情報発信、専門人材（ガイド等）の育成、事業者間のネットワーク構築
事業者・団体・指定管理者	宿泊・飲食・体験など質の高いサービスの提供、地域資源を活かした新たな魅力づくり
村民	日常の営み（風景・文化）の維持、来訪者への温かいおもてなしの実践、観光振興への理解と参画

2 PDCA サイクルによる進捗管理

本ビジョンは、策定して終わりではなく、社会情勢や来訪者ニーズの変化、各施策の実施状況を踏まえながら継続的に見直しを行い、改善を重ねていくことが重要である。

そのため、PDCA サイクルに基づき、行政、関係事業者及び検討会議参加委員などから構成する検証委員により、定期的に施策の進捗状況を確認しながら観光施策を推進する。

- モニタリング

宿泊客数や観光消費額、交流人口の推移などの客観的指標に加え、村民の満足度なども含めた観点から、観光施策の成果を定期的に確認する。

- アクションプランの策定

本ビジョンの基本施策に基づき、別途、年度ごとの具体的な取組内容を整理したアクションプランを策定し、着実な実行を図る。アクションプランについては、社会情勢や事業の進捗状況を踏まえながら柔軟に見直しを行い、継続的な改善につなげていく。